

## 放射線療法を受ける脳腫瘍患者のまだら脱毛に対する心理的变化とその要因

西病棟2階 ○朝倉恵美 桶晶子 田丸典子 高田弘美 篠原裕子  
片瀬智子 土田麻奈美 加藤昭尚 小野塚恵 山内由美子

key word: 脱毛、脳腫瘍、放射線治療、  
ボディイメージ、看護

### はじめに

脳腫瘍患者の治療法として、増悪・再発予防、根治を目的とした放射線療法、または、放射線療法と化学療法の併用療法があり、これらの治療法は全身への副作用が著しい。そのなかでも脱毛は生命そのものへ直結する影響は少ないが、患者にとって心身の苦痛が強い副作用であると考えられる。

化学療法による全身性の脱毛は、一般に知られており、先行研究ではその心理的变化や精神的苦痛の強さが明らかにされている。一方、頭皮を介し脳腫瘍へ施行される放射線療法は脳神経外科特有の治療方法である。そして、副作用の一つとして局所的な「まだら脱毛」があるが、患者は特に不安を表出することはないように思われる。しかし、研究者らは、日々の看護の中で、まだら脱毛という特殊な髪型による精神的苦痛が、患者に潜在しているのではないかと考えた。

脱毛に関する先行研究では、まだら脱毛に対する患者の心理的变化やその特徴は明らかにされていないのが現状である。よって、本研究で、放射線療法を受ける脳腫瘍患者のまだら脱毛に対する心理的变化とその要因を質的に明らかにしたので報告する。

### I. 研究方法

- 用語の定義：本研究では、まだら脱毛を、照射部位と一致する頭髪の局所的な脱毛と定義した。
- 対象：脳腫瘍摘出術後に放射線療法を行なった患者のうち、意識障害や治療開始時の脱毛がなかった脳腫瘍患者（化学療法併用の場合、脱毛を来たしにくい薬剤を併用していた脳腫瘍患者）で、治療後6ヶ月以内、かつ、研究参加の同意を得られた男性3名、女性4名、計7名であった。年齢は42～68歳、平均年齢52.4歳であった。
- 調査期間：平成16年7月～8月。
- データ収集方法：半構成的質問で構成した面接ガイドに沿って、放射線治療前・中・後それぞれでまだら脱毛に対してどう思ったかを聞いた。各面接はプライバシーの保持できる個室で、研究者2名が1時間程度行なった。また、面接内容は対象者の許可を得てMDレコーダーに録音した。
- データ分析方法：質的研究のアプローチの手順に沿い、1) 面接内容から逐語録を作成し、逐語録を読み返しなが、同じ内容について語られている部分で区切りコード化を行なった。2) 対象ごとに、治療前・中・

後のまだら脱毛に対する心理やその要因を表すコードを選択しまとめた。また対象の表情、言葉の抑揚や語った頻度、強意語から心理に強弱を付けた。3) 全対象のコードを集め、共通点や類似点、相違点などからコード群を分類し、サブカテゴリーを抽出した。4) サブカテゴリーを更に整理・分類して、カテゴリーを抽出し、心理的变化の過程とその要因を描出した。信頼性を確保するために、各分析において研究者間で討議を繰り返し、また、スーパーバイザーからの助言を得た。

6. 倫理的配慮：事前に研究の主旨、得られた情報は研究目的以外に使用しないこと、参加を拒否しても今後の治療や看護に影響しないことを説明し、書面において同意を得た。

### II. 結果

放射線療法の副作用である、まだら脱毛に関する知識の獲得は、主治医からの説明によって初めて獲得したケースと、これまでの人生経験の中で獲得していたケースの2通りであった。しかし、まだら脱毛に対する思いを表現した言葉に大きな違いはなかったため、合わせて分析を行なった。そして、放射線療法を受ける脳腫瘍患者のまだら脱毛に対する心理的变化とその要因について、対象者から得たデータの分析から501のコード、35のサブカテゴリー、13のカテゴリーを抽出した。以下、コードを「」、サブカテゴリーを<>、カテゴリーを【】で表記する。

- まだら脱毛に対する心理的变化
  - 治療前から終了・社会復帰の段階で常にある心理  
【まだら脱毛への受動的な同意】：対象は治療前に、主治医より放射線治療についての説明を受け、治療に臨んでいた。そしてこの時期に、治療に伴うまだら脱毛の必然性に対する拒否的な言動はなく、<仕方ないという同意>や<治療や副作用への覚悟に伴った同意>の心理が見られた。この心理は、治療が開始され、実際にまだら脱毛が起こってからも変わらなかった。むしろ、対象はより強い口調で、何度も繰り返し思いを表出するようになり、【まだら脱毛への受動的な同意】の強まりが考えられた。しかし、治療終了から社会復帰の段階になると、社会生活での苦悩を表す言葉が多く語られる一方、【まだら脱毛への受動的な同意】を表す言葉の口調は弱く、語られる頻度は少なかった。よって、受動的な同意は持続していたが、心理は弱まっていたと理解できた。
  - 治療前の心理 【まだら脱毛への予期的悲嘆】：この時期は、まだらとは言えく愛着のある髪が抜けるといふ寂しさ>や<まだら脱毛という制御不能な髪型に

なることへの抵抗感」といった心理が抽出された。

### 3) 治療中、まだら脱毛が起こる前の心理

**【まだら脱毛が起こらないことへの苛立ち】**:この時期は、まだら脱毛が現実になり「もどかしい」、「恐怖」といったくまだら脱毛が間近に迫っている緊迫感」とく治療効果の目安である、まだら脱毛が起こらないことへの焦り」の心理が抽出された。また、【まだら脱毛への予期的悲嘆】の心理は弱まっていた。

### 4) まだら脱毛直後の一時的な心理

**【まだら脱毛が起こる衝撃】**:この時期は、まだら脱毛が実際に「多量・急速・広範囲」で起こり、く自分の想像以上に容赦ないまだら脱毛への驚き」とくまだら脱毛という容姿への一時的な驚き」の心理が抽出された。この【まだら脱毛が起こる衝撃】は、脱毛出現直後に限定して見られた。

### 5) 治療中、まだら脱毛後の心理

**【ボディイメージの変化への抵抗】**:この時期は、くまだら脱毛状態の不自然さからくる違和感」、「みじめ」といったくまだら脱毛により以前の自分を失った喪失感」などの心理が抽出された。また、くまだら脱毛である自分を見たくないという拒絶感」、く他者にまだら脱毛である自分を見られたくないという羞恥心」といった悲観的心理も抽出され、社会復帰が近づくにつれ更に強くなった。一方、治療前からの【まだら脱毛への受動的な同意】の心理は強まり、まだら脱毛に対する受け入れと抵抗のアンビバレンスな心理状態であると理解できた。

### 6) 治療終了から社会復帰の段階

**【普遍化への願望】**:この時期は、く外見上まだら脱毛を隠せることへの安堵」、くまだら脱毛の特殊性による社会の中での疎外感」などのまだら脱毛の状態で、社会生活を送ることへの苦悩を表す心理が抽出された。この心理は、【ボディイメージの変化への抵抗】の心理と同様に、社会復帰が近づくにつれ更に強まっていた。【まだら脱毛への受動的な同意】の心理は、持続しているものの弱まった。この時期は、治療前からの段階でまだら脱毛を最もネガティブに捉え、かつ心理の揺れ動きが激しい段階であると理解できた。

### 2) まだら脱毛に対する心理的変化の要因

#### 1) 【まだら脱毛への受動的な同意】を支える要因

(1) **【疾患やまだら脱毛への理解に関するもの】**:対象は、「治療最優先」、「まだら脱毛を治療効果の目安にしている」と強く語っており、【まだら脱毛への受動的な同意】の根本的要因としてく脳腫瘍による生命そのものへの危機感」を最も強く抱いていた。また、「まだら脱毛は一時的なもの」といったく治療後髪型を再び制御できることへの保障」も要因となっていた。この2つの要因は対象自身の自覚に加え、「主治医からの分かりやすい説明」からの認識でありく医師からの納得のいく説明」も要因となっていた。

#### (2) 【まだら脱毛患者に対する他者からの認識に関するもの】

病院、特に脳神経外科は、「頭部に傷や剃毛、脱毛のある患者が多い環境」でありく病院というまだら脱毛を肯定する環境」と言える。一方、一般社会では、「脱毛は、癌や哀れみの象徴」であり、く一般社会というまだら脱毛を気にしなければならない環境」である。対象は、それぞれの環境における他者からの認識を気にしていた。特に、く病院というまだら脱毛を肯定する環境」は【まだら脱毛への受動的な同意】のポジティブな要因となり、逆に、く一般社会というまだら脱毛を気にしなければならない環境」は、治療終了から社会復帰までの【まだら脱毛への受動的な同意】を弱めるネガティブな要因となっていた。

(3) **【治療中におけるまだら脱毛より高い関心事に関するもの】**:治療中、まだら脱毛が生じてからは【ボディイメージの変化に対する抵抗】が抽出されたが、まだら脱毛という副作用は『苦痛の度合いが低い』あるいは『苦痛がない』と対象は語っており、他の副作用に比べ、まだら脱毛への関心は低かった。具体的には、「身体的苦痛の方が強い」、「身体症状出現への不安」といったく身体的副作用による苦痛に集中した思考」やく社会復帰への渴望に集中した思考」が、まだら脱毛より高い関心であった。また、治療の終盤になると、「身体症状が軽減し、社会復帰への目途が立った」ケースが多くく患者役割行動からの離脱に伴う社会生活への強い関心」が起こっていた。治療終了から社会復帰の段階になるとく治療・入院生活からの開放による喜び」が大きくなっていった。これらのまだら脱毛より高い関心事があることで、まだら脱毛というボディイメージの変化に意識が集中せず、【まだら脱毛への受動的な同意】を維持することができていた。

(4) **【サポートを受けることのできる家族関係に関するもの】**:対象は治療前から治療終了・社会復帰に向け、く家族からの肯定的な理解」とく精神的サポート」を受けており、【まだら脱毛への受動的な同意】の要因となっていた。

(5) **【他患者との肯定的な相互作用に関するもの】**:「自分は軽症」というく自己を楽観視できる他患者との関わり」やく他患者からの精神的サポート」があり、【まだら脱毛への受動的な同意】の要因となっていた。

(6) **【心を許せる看護師の存在に関するもの】**:看護に対しては、く看護師が病状を理解し対処してくれる安心感」、くいつでも話を聴いてくれる看護師の関わり」、く元気や明るさ」といったくポジティブな気持ちにさせてくれる看護師の関わり」の心理が抽出され、【まだら脱毛への受動的な同意】の要因となっていた。

#### 2) 【普遍化への願望】の要因

**【まだら脱毛状態での社会的役割復帰に関するもの】**:治療終了から社会復帰の段階になると、く仕事や家庭上の役割復帰への使命感」を強く認識していた。また、「まだら脱毛による仕事や対人関係への危惧」といったくまだら脱毛を隠さなければならない状況」を

具体的に想像したり、現実化されるようになるため、社会生活を送ることへの苦悩を表す【普遍化への願望】の心理を抱くようになっていた。

3) 他の心理的变化は、まだら脱毛というエピソードに対する変化であり、特徴的な要因は見られなかった。

### Ⅲ. 考察

#### 1. 放射線治療前の看護

脱毛は身体的自己の喪失であり不安定な心理状態を生じさせるもの<sup>1)</sup>の一つである。本研究でも、まだら脱毛が生じた前後で同様の心理があり、実際に脱毛が生じてからは【ボディイメージへの変化への抵抗】の心理があった。しかし、対象は治療を拒否せず、治療効果の目安であると冷静に受け止めていた。このことは、まだら脱毛という喪失への不安はあるものの、“人間の持つ最も根源的な不安である死に対する不安”<sup>2)</sup>、つまり、脳腫瘍による生命そのものへの危機感の方が強く、＜仕方ないという同意＞と＜治療や副作用への覚悟に伴った同意＞しか選択する余地のない対象の切羽詰った心理と考えられた。

化学療法の副作用による脱毛は、先に、化学療法前から後で関心は高く精神的ダメージが大きい<sup>3)</sup>、自己イメージの変化を受け入れられないことが多い<sup>4)</sup>と述べられている。しかし、本研究ではまだら脱毛への関心や精神的ダメージは低く、まだら脱毛を治療効果の目安として、冷静に受け止めることができ、違いが見られた。この理由として、化学療法は病名告知と治療の説明が同時であり、疾患へのショックが大きい状態のため理解が不十分になっている<sup>5)</sup>一方、放射線療法の説明は、病名告知から開頭手術を経て状態が安定してから行なわれ、対象は疾患を受け止めた上で説明を受けるといふ、治療前の脱毛に対する理解の準備状態に違いがあるためと考えられた。このことより、治療前患者が【まだら脱毛への受動的な同意】の心理を持つことの重要性が示唆され、看護師は放射線療法の導入前から患者の精神面にに関わり、疾患への理解や説明を受ける前の心の準備状態、及び、治療やまだら脱毛を含めた副作用に関する説明後の理解状況を把握し、納得して治療に臨めるよう援助する必要があると考えられた。

#### 2. 放射線治療中の看護

化学療法は治療期間が長く、また、患者の治療拒否の原因にもなっている<sup>6)</sup>。また癌患者になることへの抵抗や不安、再認識を起こす要因になっている<sup>7)</sup>と言われており、ネガティブに捉えられている印象を受ける。一方、放射線治療は短い治療期間で、治療終了後は退院となることが多い。それ故に、自己の関心をまだら脱毛へ向けるのではなく、退院後の生活といった次のステップや目標に向け、ポジティブに思考することができていたと考えられた。このことより、看護として、治療を継続していく為には患者の目標への決心を支持することが重要であると考えられた。

#### 3. 放射線治療終了から社会復帰の看護

この時期は、自己の容姿を整えながら社会復帰することを具体的に考え、対処しなければならず、対象はまだら脱毛に対しての受け入れと自己への抵抗、他人と同じようになりたいという願望といった様々な心理で揺れ動いていた。よって、自己を否定的に捉えやすく精神的サポートのニーズがあると考えられる。そして、看護として、患者の思いに寄り添い、退院後の生活や容姿の工夫等について共に考え、患者が自己決定し、また前向きな思考を維持できるよう意図的に関わることの必要性が示唆された。

### Ⅳ. 結論

1. まだら脱毛への特徴的な心理として【まだら脱毛への同意】、【普遍化への願望】が明らかになった。
2. 【まだら脱毛への受動的な同意】は治療前から治療終了・社会復帰の段階で常に見られた。
3. 【まだら脱毛への受動的な同意】を支える要因は、【疾患やまだら脱毛への理解】、【まだら脱毛患者に対する他者からの認識】、【治療中におけるまだら脱毛より高い関心事】、【サポートを受けることのできる家族関係】、【他患者との肯定的な相互作用】、【心を許せる看護師の存在】に関するものであった。
4. 【普遍化への願望】の要因は、【まだら脱毛状態での社会的役割復帰に関するもの】であった。

#### 終わりに

本研究の対象は7名であったため、一般化には限界があり、今後は対象を拡大して検討する必要がある。

#### 引用文献

- 1) 岡堂哲雄・鈴木志津枝：危機的患者の心理と看護，中央法規出版，P12-15，1988.
- 2) 岡堂哲雄：病気と人間行動，中央法規出版，P158，1988.
- 3) 荒川唱子：癌化学療法による副作用と選択的要因との関係，日本看護科学学会誌，16(3)，p21-29，1996.
- 4) 遠藤久美子・荷福ますみ，他：卵巣癌患者の化学療法克服過程，看護実践の科学，2，p86-96，1993.
- 5) 岩瀬 薫・浅井千佳，他：はじめて化学療法を受ける患者の心理とその援助，日本看護学会論文集 32回（成人看護Ⅱ），p153-155，2001
- 6) 阿部恭子・大野朋加：がん化学療法の看護 主な副作用とその対応 脱毛，ナース 23巻11号，p57-61，2003.
- 7) 今泉郷子・村山康子，他：化学療法を受ける女性生殖器がん患者の脱毛に対する受けとめ方の変化，川崎市立看護短期大学紀要 7巻1号，p71-76，2002.

#### 参考文献

- 1) ホロウェイ+ウィラー：ナースのための質的研究入門—研究方法から論文の作成まで，医学書院，2000.
- 2) メイブ・ソルター：ボディ・イメージと看護，4，医学書院，1992.
- 3) 鳥越るみ子・久保幸子，他：化学療法による脱毛への対処行動がその後の治療への取り組みに与える影響，日本看護学会論文集 29回（成人看護Ⅱ），p132-134，1998.

表1 まだら脱毛への心理

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
まだら脱毛への受動的な同意	仕方ないという同意	「医師の話を聞いてから諦めていた」、「仕方ない」「おまかせするしかない」、「開き直っていた」「命優先でそれどころではない」
	治療や副作用への覚悟に伴った同意	「心構えはできていた」、「どうせ生えてくる」
まだら脱毛への予期的悲嘆	愛着のある髪が抜けるという寂しさ	「まだら脱毛であっても毛が抜けて寂しい」
	まだら脱毛という制御不能な髪型になることへの抵抗感	「抜けたあとのことを考えると抵抗感がある」「全部抜けてくれたらいい」、「頭髪はあって当然」
	まだら脱毛への曖昧なイメージ	「脱毛範囲や量・抜け方に対して想像つかない」「変になったら坊主じゃしようか」
まだら脱毛が起こらないことへの苛立ち	まだら脱毛が間近に迫っている緊迫感	「脱毛が迫ってくる恐怖」、「もどかしい」
	治療効果の目安である、まだら脱毛が起こらないことに対する焦り	「放射線が効いてないのではないかな」「なかなか起こらないもどかしさ」
まだら脱毛が起こる衝撃	自分の想像以上に容赦ない	「思っていたより多く抜けた」
	まだら脱毛への驚き	「広範囲に抜けた」、「抜けるスピードが速い」
	まだら脱毛という容姿への一時的な驚き	「見た目に驚いた」、「想像していた姿と違った」
ボディイメージの変化への抵抗	まだら脱毛状態の不自然さからくる違和感	「触ると、抜けたところとの差が激しい」、「寒い」「ついつい気になって頭部を触ってしまう」
	まだら脱毛により以前の自分を失った喪失感	「みじめ」
	部分的ではあるが髪そのものを失った喪失感	「髪が抜けて寂しい」
	まだら脱毛である自分を見たくないという拒絶感	「変な髪形だ」、「抜け毛が汚い」、「見苦しい」
	他者にまだら脱毛である自分を見られたくないという羞恥心	「恥ずかしい」、「他の人には見られたくない」
普遍化への願望	外見上まだら脱毛を隠せることへの安堵	「思ったより早く生えてよかった」、「隠せてよかった」
	毛髪再生への願望	部分的だから「帽子をかぶると普通に見える」「毛が早く生えて欲しい」、「早く生え揃って欲しい」
	まだら脱毛の特殊性による社会の中での疎外感	「脱毛自体、特殊」、「部分的に抜けて髪型が特殊」「脱毛=箔のイメージ」、「人に気を遣われる」

表2 まだら脱毛への心理的变化への要因

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
①疾患やまだら脱毛への理解に関するもの	脳腫瘍による生命そのものへの危機感	「治療が最優先」、「脳腫瘍の予後に対して不安がある」「まだら脱毛を治療効果の目安にしている」
	治療後髪型を再び制御できることへの保証	「まだら脱毛は一時的なものであり再生への保障がある」「部分的であり、残る頭髪があるので安心している」「元々ハゲを肯定する価値観に伴う楽観的評価」
②まだら脱毛患者に対する他者からの認識に関するもの	医師からの納得のできる説明	「主治医から厳しく分かりやすい説明があった」「主治医への信頼がある」
	病院というまだら脱毛を肯定する環境	「まだら脱毛への偏見のない、一般社会から離れた環境」「脳神経外科は、頭部に傷や剃毛、脱毛のある環境」
③治療中におけるまだら脱毛より高い関心事に関するもの	一般社会というまだら脱毛を気にしなければならない環境	「脱毛は、がんや哀れみの象徴だ」「まだら脱毛は普通ではなく特殊」
	身体的副作用による苦痛に集中した思考	「吐き気や倦怠感などが強く、それどころではない」「いつ身体症状が出るのかという不安の方が大きかった」
	社会復帰への渴望に集中した思考	「早く治して家に帰りたい」、「これが終われば家に帰れる」
	患者役割行動からの離脱に伴う社会生活への強い関心	「放射線治療の終盤になると身体症状が軽減した」「社会復帰への目途がたった」、「治療は楽だった」
④サポートを受けることのできる家族関係に関するもの	治療・入院生活からの開放による喜び	「精神的な開放感」、「自分らしい安楽な生活ができる」
	家族からの肯定的な理解	「病气やまだら脱毛の自分を受け入れてくれた」「分かってくれた」
⑤他患者との肯定的な相互作用に関するもの	家族からの精神的サポート	「励ましてくれた」、「一緒にいてくれた」
	自己を楽観視できる他患者との関わり	「同じ治療中をしている他患者はいなかった」「他患者の辛い姿を見なくて済んだ」「自分は軽症の方だった」
	他患者からの精神的サポート	「同室患者との会話が進まなくなった」、「心強かった」
⑥心を許せる看護師の存在に関するもの	看護師が病状を理解し対処してくれる安心感	「入院してよかった」、「何かあったら対応してくれる」「病状を分かってくれている」
	いつでも話を聞いてくれる看護師の関わり	「話しやすい」、「聞いてくれる」、「声をかけてくれる」
	ポジティブな気持ちにさせてくれる看護師の関わり	「元気になる」、「気分転換になる」、「明るい」
⑦まだら脱毛状態での社会的役割復帰に関するもの	仕事や家庭上の役割復帰への使命感	「仕事や家庭がある」
	まだら脱毛を隠さなければならない状況	「自分の病気を知らない人が多い」「まだら脱毛は仕事上の支障」、「対人関係への危機」

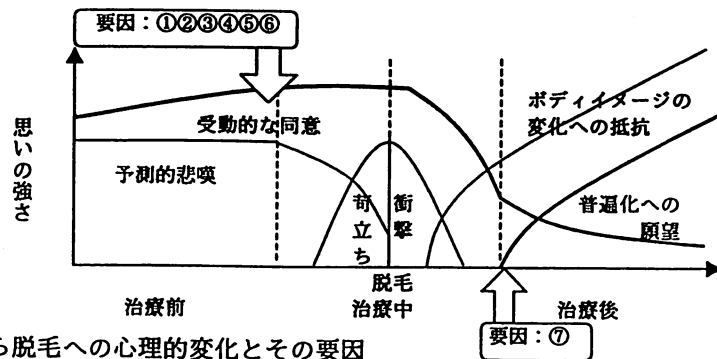


図1 まだら脱毛への心理的变化とその要因